平成 23 年2月 25 日

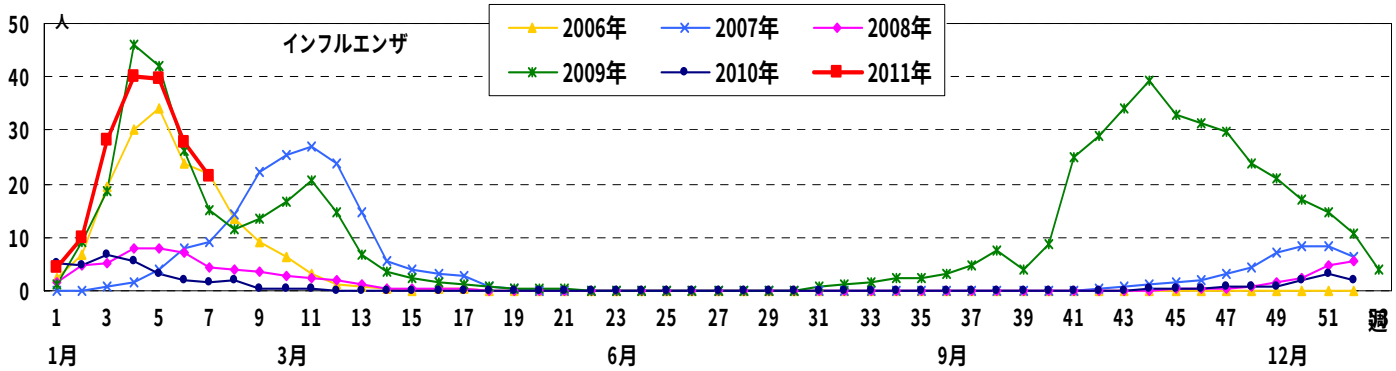
横浜市インフルエンザ流行情報8号（第7週）

横浜市健康福祉局健康安全課　／　横浜市衛生研究所

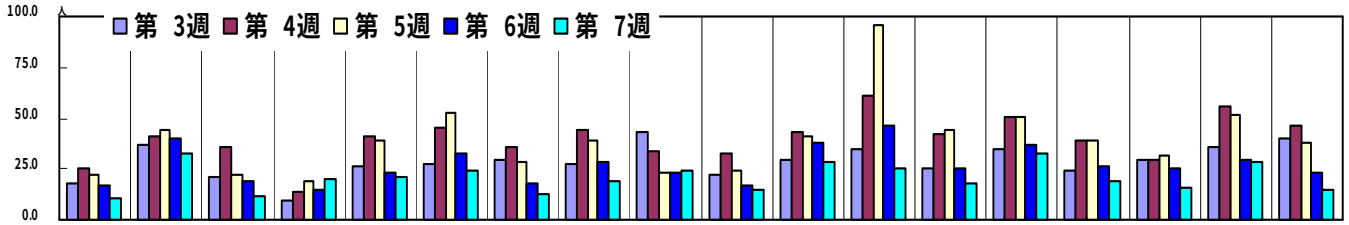
トピックス

- 第7週（2月14日からの週）で、市内の定点当たり 21.27 と3週続けて減少しています。
- 第7週の市内の定点医療機関の協力による迅速キットでの結果は、A 型 1424 件、B 型 1098 件でした。B型は前週とほぼ同数ですが、A 型が大きく減少していますので、B 型の割合が4割以上となっています。
- 施設閉鎖は、第5週に73施設、患者1845人とピークでしたが、第 7 週では 33 施設、患者 570 人と減少しています。
- ラピアクタ（点滴用インフルエンザ治療薬）に対する耐性ウイルスが確認されました。

1　市内 150 か所（小児科 91　内科 59）の定点医療機関からの報告で、第 50 週（12 月 13 日～19 日）に「流行のめやす」である「定点あたり1」を超え、第4週に 40.05 とピークとなりましたが、第 7 週（2月 14 日～）では定点あたり 21．27でした。

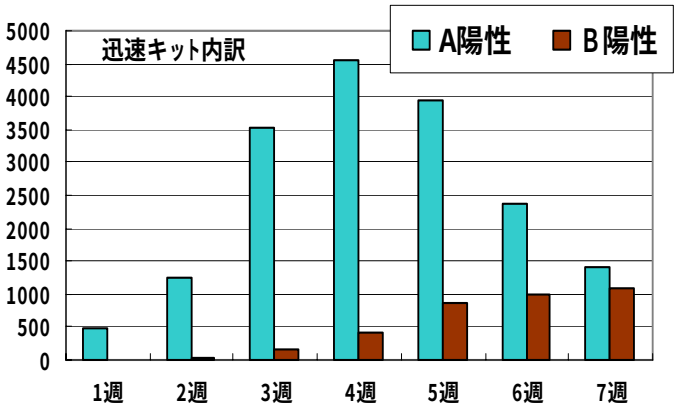


2　行政区別状況：中区が増加、磯子区はほぼ横ばいですが、その他 16 区で報告数の減少が見られています。行政区別では、都筑区の 32.63、神奈川区の 32.40 が定点当たり 30 を超えています。

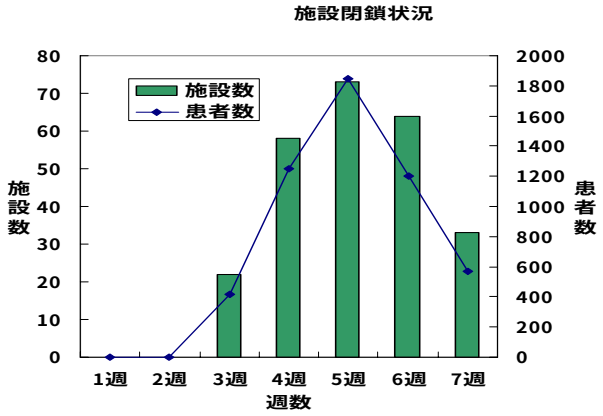


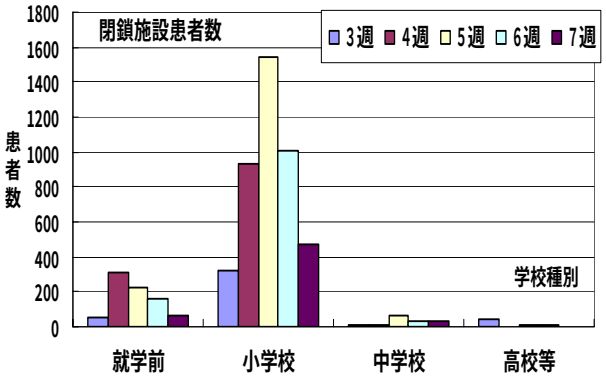
鶴見	神奈川	西	中	南	港南	保土ケ谷	旭	磯子	金沢	港北	緑	青葉	都筑	戸塚	栄	泉	瀬谷
10.8	32.4	11.6	20	20.8	24	12.7	19.4	23.9	15.1	27.9	25.7	18.2	32.6	18.5	15.6	28.9	15

3　迅速キット内訳：現時点での市内流行状況は、第7週では A 型 56%、B型 43%、A B陽性1%です。
　B型の割合の多い区は、中区 66%、南区 61%、磯子区 61%、神奈川区 59%となっています。

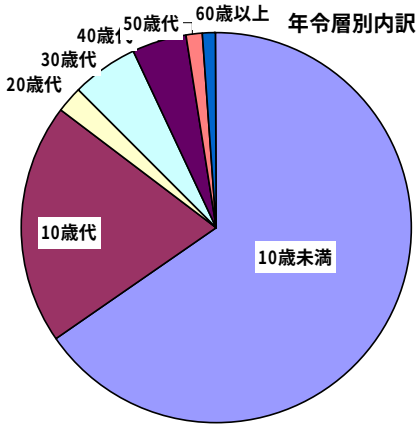


4　施設閉鎖状況：第1週、第2週の報告はありませんでしたが、第5週では、73 施設、患者 1845 人の報告に至るまで増加していましたが、第6週では 62 施設、1200 人と減少しています。第6週の患者報告の内訳を見ると、84%が小学校、8%が就学前施設と、比較的低年齢層が主となっています。

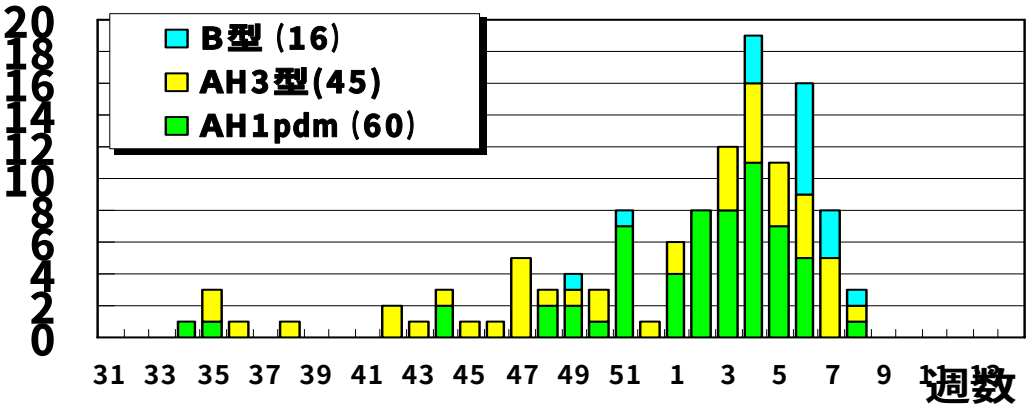




5　年齢層別内訳：85%が 20 歳未満と、若年者に多く報告されています。



6　病原体定点インフルエンザ分離・検出状況：今シーズンは、11 月まではA香港型が優勢でしたが、12 月に入りA新型が増えてきました。1月はA新型が優勢となりましたが2月に入り、B型の検出も見られ、現在A新型、A香港型、B型の3つの型が検出されています。



7　ラピアクタ（点滴によるインフルエンザ治療薬）で治療後の方に、抗インフルエンザ薬耐性を疑わせる遺伝子変異（H275H／Y）が見つかりました。国立感染症研究所で薬剤耐性試験を実施し、タミフルに対するIC50 値が感受性参照株より約 260 倍上昇し、ラピアクタに対しては約 60 倍上昇しており、両薬剤に対する感受性が低下していたことが確認されました。

詳しくは、国立感染症研究所HP　＜ペラミビル治療患者からのH275　耐性ウイルス検出事例報告＞　をご覧ください。http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3732.html

お問い合わせ先

横浜市健康福祉局健康安全課　TEL 045（671）2463

横浜市衛生研究所　検査研究課ウイルス担当　TEL 045（754）9804

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課　TEL 045（754）9815